

「国立大決戦」とその時代

ー1980年代後半から1990年代前半の関西における

学生アメリカンフットボールに関する歴史的研究ー

鳥取奨護

キーワード：アメリカンフットボール，関西学生リーグ，国立大決戦

1.研究の動機

アメリカンフットボールは日本において人気スポーツとは言い難い。しかし、関西で行われてきた学生スポーツとしてのアメリカンフットボールは、野球、サッカーのような人気スポーツと同等の、あるいはそれを凌ぐような注目を集めることもあった。

特に、1990年の神戸大学と京都大学の一戦は、国立大学同士によってリーグ優勝が争われた唯一の試合であり、新聞等のメディアにも「国立大決戦」という見出しで大きく取り上げられた。そこで、筆者はこの「国立大決戦」がいかなる背景の元に実現したのかに興味を持った。

2.研究の目的と意義

「国立大決戦」とその背景を中心に、1990年代初頭の関西における学生アメリカンフットボール人気の高揚の背景と実態を明らかにすることを本研究の目的とする。

また、それを通じて今後の学生スポーツのあり方を検討するための有用な手がかりを示すことを本研究の意義とする。

3.先行研究の検討

関西におけるアメリカンフットボールに関する歴史研究には新村佳史(2004)がある。これは、日本へのアメリカンフットボールの伝来期(1920年)から1990年代後半までの関西におけるアメリカンフットボールの歴史を明らかにしている。しかし、それらはあくまで通史的に当時の出来事を解明しているにすぎず、ある一試合に着目して、それを社会的背景と関連付け

て、アメリカンフットボール人気の高揚の要因を解明する研究は見られなかった。

4.研究の課題と方法

下記3点を検討することを課題と方法とする。

1) 「国立大決戦」誕生の背景(第1章)

「国立大決戦」誕生の背景として、それ以前の関西学生リーグの状況について検討する。

2) 「国立大決戦」の実態(第2章)

1) で明らかになった背景を踏まえながら、1990年の関西学生リーグに着目し、「国立大決戦」の全容を明らかにする。

3) 「国立大決戦」が与えた影響(第3章)。

2) で明らかになった「国立大決戦」が後の両校と関西学生リーグに与えた影響を検討する。

結論部では、「国立大決戦」のスポーツ史的意味を、1980年代から90年代における学生スポーツ人気の高揚という観点から評価する。

5.本論

5.1. 「国立大決戦」誕生の背景

「国立大決戦」以前の関西学生リーグは、関学一強時代、ライバル京大の登場と躍進、そして戦国リーグとなった関西学生リーグの3つの時代に分類される。

まず、初めに1950年代及び、1960年代は関学が他校に先んじてフットボールシステムの確立、指導体制の構築により、リーグ戦145連勝などの偉業を達成する。

その後、1960年代から1970年代には、カリスマ指導者水野弥一を擁した京大が力を付け、遂に関学のリーグ戦連勝記録を145でストップ

させる。このライバルの登場が関西学生リーグの人気を高める要因となる。

そして、1980年代には、その京大の勢いに続いた他校の躍進が、関西学生リーグを戦国リーグと呼ばれる混戦のリーグに変え、更なる人気の高まりを見せる。この時代に神大が1部リーグに定着し、徐々に力を蓄えていく。

5.2. 「国立大決戦」の実態

1990年は混戦のリーグだったが、前年度優勝校の関学に創部史上初の勝利を挙げた神大と前年度5位に終わり、雪辱に燃える京大が優勝戦線へと抜け出してきた。マスコミ各社は異例ともいえる国立大学による優勝争いを大きく取り上げ、遂に最終節を控え、次節の両校による直接対決が優勝決定戦になるとわかると、これを「国立大決戦」という見出しで取り上げた。これが世間の注目を集め、試合会場が急遽変更されるというこれまた異例の事態の中、1990年11月24日、「国立大決戦」は行われた。

試合は45-0で京大の完勝に終わったが、これは大一番の試合に向けた準備と経験の差ということが両校関係者のインタビューと当時の資料から読み取れる。

優勝決定戦が、リーグ戦で快進撃を進めた神大と、奇しくも同じ国立大学として先に世間に旋風を巻き起こし、強豪校として定着していた京大による最終戦ということで、世間の注目度は大いに高まり、関西アメリカンフットボール連盟関係者の方々の広報活動とそれを受けたマスコミが大きく取り上げることで、この時代に「国立大決戦」は実現したといえる。

5.3. 「国立大決戦」が与えた影響

「国立大決戦」は神大・京大両校、そして関西学生リーグにそれぞれ影響を与えた。

神大は優勝を成し遂げることができず、1994年には2部リーグに降格してしまう。一番の原因はコーチによる指導体制が整っていなかったことであつた。1990年は主将小武を中心とする4回生の意識改革を含めたチーム作りが功を奏し、快進撃を見せるが、戦術が重要なウエイト

を占めるアメフトにおいて選手主体の環境は安定して結果が出せる環境とは言い難かった。対する京大は名将水野を中心としたコーチングシステムを確立し、1990-1992年にリーグ3連覇を達成し、三強時代となった関西学生リーグでも強豪校の位置をキープし続ける。

関西学生リーグは以後三強時代となる。関学、京大に加え、「国立大決戦」で奮闘した両国立大学に対し、リクルーティング活動を活発化させた立命館が頭角を現す。三校それぞれが個性を持ったチーム作りを行い、リーグ戦でも好ゲームが続いたこの時代に、関西学生リーグのブームはピークを迎える。

6. 結論

関西学生リーグは常に個性の強いライバルの存在が人気を高めてきた。関学はたしかに関西学生リーグをリードしてきたが、関学一強時代にはそれほどアメリカンフットボール人気は高くなかった。しかし、そこに国立大学の雄として、他にないパワーフットボールを標榜する京大が異彩を放つライバルとして頭角を現したからこそ、世間の注目が関西学生リーグに集まった。その後の関西学生リーグで、打倒京大を掲げて台頭した神大も当時のスポーツ界全体を通してみれば、国立大学である点、コーチ主体の逆をいく自主運営で結果を出してきた点で、異彩を放っているといえる。そのため、「国立大決戦」は、1990年の学生スポーツ全体的话题をさらう注目度ナンバーワンの出来事となった。そしてそれはその後の関西学生リーグに立命館という新たな個性を持ったライバルを生み出すこととなり、関西学生リーグ人気のピークに繋がる。これらから、学生スポーツはあくまでアマチュアスポーツであり、プロスポーツのように、プレーの華やかさだけが人気を集める要因にはならないということが示されている。その意味で、「国立大決戦」は両校から放たれる強烈な個性でもって、世間の注目を集める学生スポーツの在り方について示していると結論付けられる。

(指導教員 秋元忍)